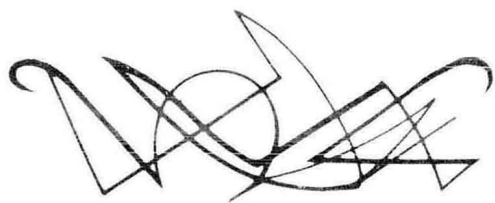


第三卷

日本現代文學
全集

36

柳田國男集



日本現代文學全集・講談社版 36

外江劍
天尙小
杉下司
小木上
集

編 集 整
伊 藤 郎
龜 井 勝
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉

日本現代文學全集

36

柳田國男集

編集

伊藤 整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙吉
山本健吉



昭和43年2月10日印刷
昭和43年2月19日發行

定價 600圓

© KÔDANSHA 1968

著者 柳田國男

發行者 野間省一

印刷者 北島織衛

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽2-12-21
電話東京(942)1111(大代表)
振替東京3930

印刷 大日本印刷株式會社
製本 株式會社 興陽社
刷 株式會社 大進堂
版 株式會社 岡山紙器所
製 株式會社 石井
製 株式會社 石
背 日本クロス工業株式會社
表紙 日本加工製紙株式會社
紙 日本州製紙株式會社
クロ 安倍川工業株式會社
ス 三菱製紙株式會社
用 神崎製紙株式會社
紙 見返し用紙
紙 扉用紙

落丁本・亂丁本はお取り替えいたします。

柳田國男集 目次

卷頭寫眞
筆 蹟

海南小記

自序	七
海南小記	九
與那國の女たち	五
南の島の清水	五
炭焼小五郎が事	三
阿遅摩佐の島	七
附記	九

海上の道	九五
高麗島の傳説	二三
八丈島流人帳	二八
雪國の春	二四
眞澄遊覽記を讀む	二三
清光館哀史	二六
峠に關する二三の考察	二四
豆の葉と太陽	二五
美しき村	二四
武藏野の昔	二五
島	二七
川	二七

遠野物語……………	一七	稗田阿禮……………	三六
ダイダラ坊の足跡……………	三〇	折口信夫君とニホのこと……………	三三
猿地藏……………	三五	木綿以前の事……………	三六
有王と俊寛僧都……………	三三	遊行女婦のこと……………	三九
山莊太夫考……………	三〇	生活の俳諧……………	三三
笑の文學の起原……………	三六	歌と「うたげ」……………	三七
笑の本願……………	三九	國語の將來……………	三三
不幸なる藝術……………	三六	親棄山……………	三九
鳴濤の文學……………	三〇	談雀……………	三五
東北文學の研究		猿の皮……………	七一
一 義經記成長の時代……………	三九	サン・セバスチャン……………	三七
二 清悦物語まで……………	三六	書物が多過ぎる……………	三八
妹の力……………	三六		

萩坪翁追懷……………	三六四
國木田獨歩小傳……………	三六六
這箇鏡花觀……………	三六七
花袋君の作と生き方……………	三六九
『東京の三十年』……………	三七一
重い足踏み音……………	三七三
『破戒』を評す……………	三七七
蘆花君の『みみずのたはこと』……………	三七八
露伴をしのぶ……………	三七八
南方熊楠……………	三九〇
柳田國男自傳……………	四〇三
罪の文化と恥の文化……………	四〇六
イブセン雜感……………	四一五

作品解説……………	山本健吉 四一九
柳田國男入門……………	大藤時彦 四二四
年譜……………	四三三
參考文獻……………	四四五

柳田國男集

作之丞と未来三

柳田國男

北秋田の雄猿部(オオムシ)と
いふのは、今日の鹿去澤の
ことをいふか。とるかに

海南小記

自序

ジュネヴの冬は寂しかつた。岡の竝木の散り盡す頃から、霧とも雲の屑ともわからぬものが、明けても暮れても空を蔽ひ、時としては園の梢を隠した。月夜などは忘れてしまふやうであつた。木枯も時雨も此國には無かつたが、四五日に一度づゝ、ギーズと云ふしめつた風が湖水を越えて西北から吹いて来て、その度毎に冬を深くした。寒さの頂上と云ふ頃には、或朝は木花が咲く。其時ばかりは霧がすこし薄れて山の眞白な雪が見え、日影がさして鳥の姿などが目に映じた。

遠い東南の虹鮮かなる海の島と、島で行逢うた色々の人と、その折の僅かな旅の日記とを、それからそれへと思ひ出すのは、斯ういふ日の午後の散歩の時であつた。自分以外にたゞ一人だけ、沖繩と云ふ島を知つて居る人が、同じこの都のしかも同じ丘に、わづか五六町を隔てゝ住んで居るのだが、それを知りながらも訪ねて話をすることの出来ぬのが、ことに堪へがたい旅人の無聊であつた。

日本では誰知らぬ者も無いチェンバレン教授である。如何した心持からかジュネヴに来て、人に忘れられつゝ靜かに老いんとして居る。家はルッソオ舊居の近くに在つて番地までも自分は知つて居た。先生はラフカディオ・ハアンよりもたしか三つ四つ若かつたか

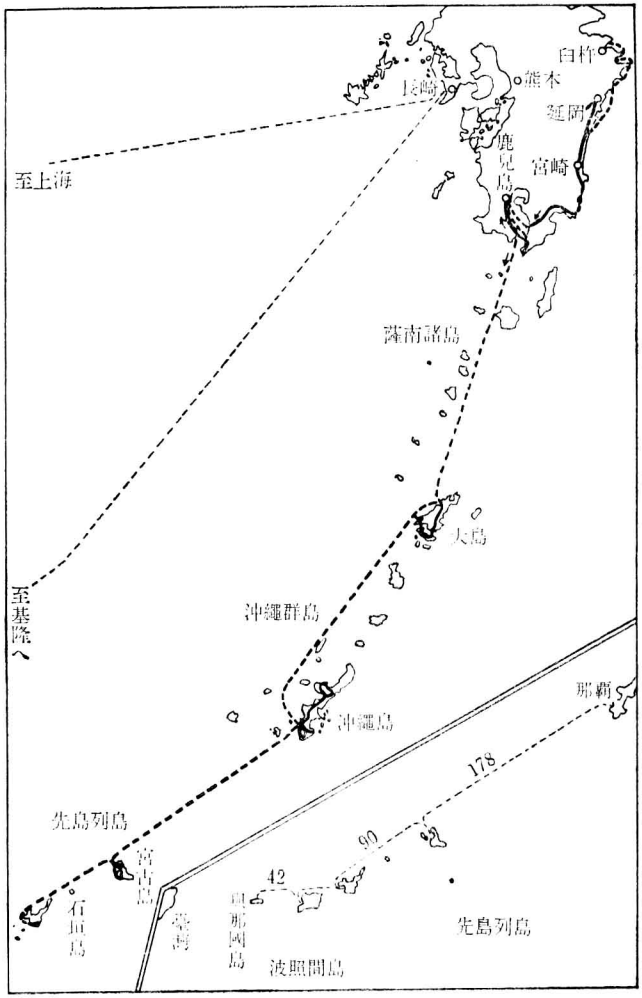
ら、まだ七十には大分間がある筈だ。ひどく眼が悪くて、其眼は腦から来て居ると云ふことであつた。強ひて面會を求め手紙を出した者もあつたが、病氣に障るからと云ふ代筆の斷りが来たさうだ。秋の初めのまだ暖かい頃までは、それでもジャルダン・アングレの樹蔭や水の音を、看護人に伴はれて逍遙して居られるのを、見かけたと云ふ人も幾人かあつた。そんなら自分もよそながら一度はと思つて、折々靜かな午後などに往つて見たことあつたが、終に目的を達せずして冬になつてしまつた。

ジャン・ロミウと云ふ日本ずきの青年工學士は、サン・ピエル大寺の横手の古本屋で、先生舊蔵の若干の和書を買入れた。之を聞いて自分たちも往つて見たが、もう大部分は賣れてしまつて、一冊の日本口語文典だけが残つて居た。有名な先生の自著であつて、しかも澤山の書入が有るのは、疑も無く覆刻の準備であつた。同行の藤井悌君が心を動かして、値段に構はず購つて還つたから、此本ばかりは久しぶりに、再び日本の日の光を見たのである。

日本と此學者との因縁は竝々でなかつた。日本に生れて一生を勉強したもののにも、チェンバレン氏だけの蒐集と述作とを、遺し得た者は多くなかつた。我々が今頃少しづゝ、必要を唱へて居る民俗誌の研究に、彼は遠國から来て三十年前に手を着けた。アイヌ民族の言語に就いても、大なる感謝は彼に屬する。殊に琉球に至つては、母方の祖父船長ベシル・ホルの曾て訪ひ寄つて、なつかしい見聞録を世に留めた島である。其孫に取つては家の學であり、由緒ある研究でもあつた。定めて人知れぬ愛着を以て、此學問の成長を希うて居たことと思ふのに、あの後先生の跡を踏んで、之を敷衍しようとした者が無いばかりか、不意なる若干の小誤謬までが、今に其儘にして棄て、あつて、本だけが所謂珍本と爲つて、讀みもせぬ人の本箱の底に追々と隠れて行くのである。先生の今の境遇を知る者には、是は言ひやうも無い寂しさであつた。

運命は此の如く、時としては人間の書齋までを支配する。古代の

海洋民族が大移動を記念すべき、有形無形の不思議な遺物、彼等に拮抗して今尙聊かも衰へざる自然變化、就中血と言語との止む能はざる混淆が、著しい影響を與へた部曲組織宗教觀念、乃至は藝術様式の島々の特色が、從來會て見ない強烈なる興味を、諸國の學界に喚び起して、次第に大規模の調査と比較研究とを開始するやうになつたのは、恰かもこの疲れたる老學者が既に其生涯の學業を切上げた際であつた。是から大いに興らうとする新機運に向つては、彼は只一箇有益なる資料たるに止まり、其計畫と希望とは、もう參加することが出来ないのである。況やこの北太平洋の一角に於て、漸く今始まつたばかりの若々しい運動、即ち島に生れた者自らが、島と島との生活の連鎖を、昔に溯つて考へて見ようとする學問の如きは、假令それが先生の深く愛した日本であり、且つ先生の感化が暗々裡に働いて居ることは確かであつても、其悦びを我々と分つことが、最早出来ぬ迄に弱つてしまはれた。以前先生が名を聞きながら、手を着ける機会を得なかつた「おもしろ御草紙」は、伊波普猷君などの辛苦に由つて今、現代に蘇らうとして居る。是がたゞ沖繩一島の寶として羨むべきもので無く、此の如き信仰歸依、此の如き情緒を、島に家する者の祖先の心裡に、漲り溢れしむるに至つた最初の力は、獨り血を共にする大八洲の國



國のみならず、同じ大海の潮に育まれて、北と南とに吹分けられた、遠い沖の小島の荒えびすの胸にも、なほ一樣に感じられて居たのでは無いか。之を推究してもらひたいのが引續いての我々の願であるが、久しい孤立に馴らされて小さな陸地を國と名づけ、渚から外をよそと考へた人々の、離れ々の生涯の勞作が、果していつの世になつたら融け合うて一箇の完成と爲るであらうか。私は斯ういふ外國の學者の老境を眺めるにつけても、散漫なる今までのディレクタンティズムの、罪深さを感じざるを得なかつたのである。海南小記の如きは、至つて小さな咏歎の記録に過ぎない。もし其

中に少しの學問があるとすれば、それは幸ひにして世を同じうする島々の篤學者の、暗示と感化とに出でたものばかりである。南島研究の新しい機運が、一箇旅人の筆を役して表現したものと云ふ迄である。唯自分は旅人であつた故に、常に一箇の島の立場からは、この群島の生活を觀なかつた。僅かの世紀の間に作り上げた歴史的差別を標準とはすること無く、南日本の大小遠近の島々に、普遍して居る生活の理法を尋ねて見ようとした。さうして又將來の優れた學者たちが、必ずこの心持を以て、やがて人間の無用なる鬭争を悔い歎き、必ずこの道を歩んで、次第に人種平等の光明世界に、入らんとするだらうと信じて居る。然らば又事業は微小なりと雖、やがて咲き香ふべきもの、蕾である。歌ひ舞ふべきもの、卵である。乃ち新しい民俗學の南無菩提の爲に、謹んで此書を以て日本の久しい友、ベシル・ホール・チェンバレン先生の、生御魂に供養し奉る。

海南小記

一 からいも地帯

尋常五學年の小學讀本の中に、

甘藷ノ名ハ地方ニヨリテ異ナリ、關東ニテハ薩摩芋トイヒ、薩摩ニテハ琉球芋トイヒ、琉球ニテハ唐芋トイフ。名稱ノカク異ルヲ以テモ、此芋ノ次第ニ西方ヨリ傳來セシコトヲ知ルベシ。

とあるのは、ほんの些しばかりだが間違つて居る。琉球では甘藷を唐芋と謂ふ者は無く、一般に之をシムと呼んで居る。シムは即ち我のイモと同じ語である。カライモ又はタウイモと云ふ名は、弘く南九州一帯に行はれて居る。従つて薩摩でも之を琉球芋と呼ぶこと

はない。琉球芋と謂つたのは九州の北の一角から中國上方に互る大區域であつたが、後漸く標準語のサツマイモに改まつて行かうとして居るのである。

此類の誤は、子供たちにもよく判ることだから、單に其地方だけの爲にならば、之を訂正する必要は無いかも知れぬ。只氣になるのは之で、甘藷は南方よりと謂はずに、西方より傳來したとする推理法である。何となれば薩摩も琉球も、日本の南部である上に、甘藷は更に其南方の、南支那から輸入して來たことが確かだからである。

以前奥州などの田舎の料理には、所謂薩摩芋は椎茸や蕈根と、同等以上の待遇を受けたものだ。それが運送が手輕に成つたばかりか、氣仙あたりの島や半島にまで、とうとう之を栽培するやうに爲つた結果、大分近頃は平凡化しようとして居る。之に反して關東の大都會には、八里半の名聲遠く轟き、青木昆陽の墓の前に、燒芋屋の組合が感謝の祭を營むやうな時代が來た。遠州御前崎附近は又事情が別で、蕈種を輸入した大澤權右衛門の記念碑は、蕈切乾生産業者等が、主として其建設の爲に奔走したやうである。同じ薩摩芋地帯の僅か數十年の歴史にも、よく見ると是だけの變化が有る。況や當初此物を沖繩に簞した野國總管、夫をヤマトに招き入れた薩州兒水の繼川利右衛門、之を中國へ傳へた石見の喜代官井戸平左衛門等の、二百年前の心持では、果して今現に生じて居る社會上の效果の、どれだけの部分迄を豫期して居たものであつたか。到底我々「おさつ」階級に屬する者の、完全に理解し得る所では無いやうに思はれる。

自分は考へる。少くとも是だけは意外の効果では無かつたかと。甘藷考其他の宣傳書を見ると、主として不作の年の百姓飯米を補ひ、或は島の流入人が飢を救ふのを以て、諸の恩澤の至極と認めて居た様である。それが今日では随分宏大な地域に亘つて、凶年でも無い年に流入人も無い人々が、必ず作り必ず食ふ農作物とは成つて居るのである。斯の如き生活上の變化は、正しく大事業である。し

かも二百何十年の歲月より他に、誰が企て、之を爲し遂げたと、云ふ人も別に無かつたのである。

カライモ地帯を旅行して見ると、又新たに國の運命と云ふやうなものを考へさせられる。海近く日の暖かい唐諸島の一部分は、曾ては疑ひもなく浦人の粟生豆生であつた。こんな雜穀類の調製が面倒で、一人を養ふ爲の面積が多く入用なものより、甘いだけでも唐諸の方が好ましい。其上に世話も人費も概して少なく、凶作の患もずつと減じ得る。沖へ出て行く舟の辨當には、片手で食へるから便利だと云つた婦人もある。かう云ふ考が元になつて、日本人なれども永年の薯と茶碗に分れ、薯の食事を常とする様になつたのである。しかも所謂港田の遠く拓かれ、清水豊かに之を灌ぐやうな濱方に於て、必ずしも急にこの薯作りの生活に移らなかつたのは、何と謂つても米に勝る食物は無いからである。水に乏しい呷や島の蔭で、以前は多分に人を住ましむる望も無かつた島場が、此唐芋の輸入に由つて、初めて或意味に於ける安樂郷と爲り、瞬くうちに今日の如き人口密集を見るに至つたのである。甘藷先生と其先進とがもし出なかつたら、此等の海岸の岡は今尙直立雜木立のまゝで、しかも我々は夙に國內に溢れて居たであらう。勿論大いに苦悶しつゝも、既によほどの人數を他國に出して居り、この所謂民族主義の時世に出くはして、今更移民問題に行詰まるやうなこともなかつたであらう。實際この小さな島國の山國に、五千九百萬人を盛り得たのは、一半は即ちカライモの奇蹟である。或は激語してカライモの災ひと謂つた人さへもあるのである。

藪から米への代用食獎勵は、成績を擧げにくい事情が少しばかりある。なあと魚類さへ澤山捕つて食へば、榮養には心配が無いと誰かは謂つた。或は又此頃の景氣なら、米を買つて食へぬことも無いが、それよりも薯で我慢して居つて、酒を澤山飲んだ方が幸福だと、謂つて居る人も有るさうだ。さうかも知れぬが其我慢だけは女房や子供にさせ、其酒は亭主ばかりが飲むのである。此の如き分配

上の慣例は、黙つて見ては居られぬやうな氣がする。

豊後では甘藷をトイモ又はタウイモと謂ふ。しかも此邊は既に自分の謂ふ唐芋地帯に屬して居る。日隅薩の海浜には、水に乏しい磯山の蔭にも、薯に出つて多くの小樂天地が出来て居る。海南奄美の列島に渡れば、薯をトンと呼ぶ人々と、ハヌス又はハンスと謂ふ人たちが、相接して住んで居り、其南は即ち沖繩のナム地帯である。更に南すると、之をアッココン又はウンティンなどと稱する先島の諸島があるが、生活の條件は諸島互に頗る相似て居る。南北三百何十里、中を隔て、廣漠の海がある。薯を此間に傳播し遂げたのは、果して皆偉人の力であらうか。或は又人間の安く活きる必要が、一部分は之を手傳つて斯んな作物を流行させて居るので無いか。自分は今でもまだ之を疑つて居る。

二 穗門の二夜

近いうちに土佐の沖へ鰯釣りに出る文度に、臼杵の町へ買物に出て來た機動船に便乗して、風の寒い午後保土の島へは渡つた。島の郵便局長の家で、此頃買求めた船であつて、前からの機關手の若い朝鮮人がまだ乗つて居る。他の乗組は何れも島の者で、自分などには解らぬくらゐの内地語で、何かこの故參の青年に對して小言を謂つて居る。しかし私に向つては極度に懇切なる人々であつた。又も來られまい、ゆつくり遊んで御出でるがよい。明日は保土の村の夜乞です。小さな神様が御降りになるので、などと謂つてくれる。夜乞とは祭の夜宮のことである。祭禮のことを神の御降りと、まだ此島では謂つて居るのである。

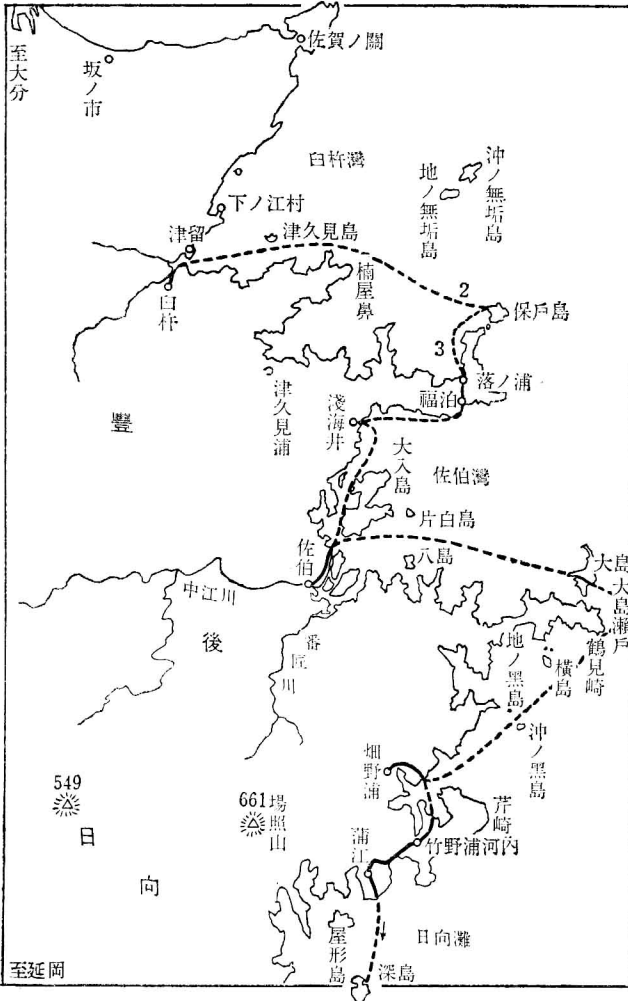
斯んなうれしい島にならば、海が荒れて閉込められても本望だと、只ちよつと考へて見たばかりで、もう早き通りに爲つて居た。船が着いて見ると僅な防波堤の蔭には、早色々の小舟が避難して居る。正面の口からは、波がだぶりと入つて來る。地方の山は一

圓の潮曇りであつた。あくる朝も裾を纏へす程の風が西から吹いて居た。對岸の四浦の鼻は手の届くほど近いが、此間はいつも潮が悪いのでよく船が覆へる。とても今日は渡されぬと謂ふから、仕方なしに今夜とまることにして、それから何遍も村の中をあるいた。全體に平地はちつとも無い島である。見上げるやうな傾斜地に、同じ様な家が境も不分明に建て續けてある。二階と下と別々に、入口を路へ附けて、二戸三戸が一棟の中に住んで居る。肥前の島栖から來た樂屋がこんな事を謂つた。よほど氣を付けぬと、同じ家へ二度入つて笑はれると。家の方でも今一段と不必要な訪問者に對しては、おまへは先程も來たては無いかと謂ふと、本當にさうかと思つて慌てて還つて行くと村の者も謂つた。

唯一つの寺の後の泉を汲んで居る。誠に感謝に價する清水であつて、爰でもやはり御大師様水と名づけ、而も其由來はもう説明し得ぬやうに爲つて居る。此靈泉の一つの缺點は、水量が人口に比例して増して來ぬことである。今日の風が雨に爲らぬやうだと、二三日の中には番を附けて、順番で汲ませねばならぬと謂つて居た。尤も風呂の水だけは別にあるが、幾つかの錢湯では祭の日のせむか、いつも裸の人の方が湯の量よりも多い。處々の井戸では洗濯をしながら、女たちが水の湧くのを待つて居る。かと思ふほど水が少ない。時々は船に桶を乗せて、四浦へ汲みに行くさうである。燃料に至

家は近年に爲つて大分増加したものでらしい。今でも行當るほど子供や女の數が多いのに、もう半月もすると壹岐五島の方から、三百何十人の男たちが、漁を終つて戻つて來る。其時だけは眞に寢る所も無いさうである。だから半分は人の家に往つて寢る。それを又樂みにして待ち待たれる若い者が多い。役場の當直室などもやはり借りられる。借ると謂ふよりは單に蒲團を持つて來て休むので、つまり島一つが大家内の一家のやうなものだ。だから其間に挟まつた旅の者には、居心地は決してよくない。

水は四百足らずの籠から、殆と



つては殆ど全部を外から持つて来ねばならぬ。周一里餘の島は、見た所九分通り畠で、タウイモバかち作るかと思ふ程だが、夫でもまだ足らぬと謂ふ。野菜は自分たちと相乗りして、昨日も澤山に輸入せられた。島には何としても作る餘地が無いのである。段々畑の頂上には、それでも泉を養ふ少しの林が有る。其左手の小さな森は以前の物見所で、登つて見ると中には島人の墓がある。樹の間から伊豫の山が見え、又水の子の燈臺が見える。島の東側もやはり皆畑で、裾の方には四反ほど水田もあり、小舟で島をまはつて之を耕しに行く。之に灌漑する池もあり、折々はそれで鴨が来て遊ぶ、又海岸の岩の蔭には河童も居る。友達の聲をして寺の和尚を夜中に喚び起し、朝の勤めの木魚を叩かせたと云ふ話もある。狸も何處から渡つたか夫婦二匹だけは居た。其一匹が殺されて、他の一つが大いに荒れたこともあつた。

こんな話を聞きあるいて、夕方に宿の郵便局に歸つて見ると、あの朝鮮人は青い仕事着のまゝで、にこ／＼と藥仕事をして居る。宵祭の馳走がまだ調はぬうちから、三四人の老女たちがもう遊びに来て居る。賀茂様の森には燈明がともつて、太鼓と石段の下駄の音とが聞える。ごろりと横になると、空には雲があるいて居る。終日白く騒いだ海面が、誰にも顧みられずに暮れてしまふ。其うちに下からは、婆さんたちの歌の聲が聞えて来る。伊勢踊と云ふさうだが、間の延びた伊呂波歌で、弘法大師の事を作つたものらしい。大層調子が揃ふなと思つて覗いて見ると、團扇を叩きながら婆が二人踊つて居た。それから又大に笑ひ、今度は別の歌である。若い後家なら何とかだと歌つて居る。あれは私が可愛さうだから、元氣を付けてやると言つて歌ふのですと言ひながら、室を片付けに来た未亡人は、改めて又眼を拭つて居る。斯う云ふ生活も保土の島には有つたのだ。

次の朝は天氣であつたから、思ひ切つて小舟を下させた。すると此婦人を初め二三の島の人が、今日の祭の案内に、四浦の村々へ餅

を持つて一緒に乗つて行く。出て見ると浪はまだ高いが、親類の客や土産の大根葱などを乗せて、もう戻つて来る島の船もある。自分の船にも夥しい重箱の包が有る。いつの間にかこんなに掛いたかと思ふほどの餅である。今日の船は餅船だ。あんた方は餅に便船したやうなもんだと笑ひながら、島の人たちは別れて浦々に上陸し、船には自分等ばかりが淋しく残つた。

三 海ゆかば

海で死んだ人の話を幾つも聞いた。越知浦では霧の深い冬の或日の朝、村の某の手繰網の小舟が、からつぽで波に漂うて居るのを見付け、それから其附近で倅の二十三になる青年の、厚い綿子を着込んだ亡骸を引揚げた。此あけがたに親子で出た管と、熱心に捜し廻ると三日目に漸く、父親の方も淺ましい姿に爲つて出て来た。常からどうも頭丈とは謂はれぬ息子であつた。多分は櫓の網でも切れて水に墜ちたのを、後先も考へずに助けに飛込んだものだらうと、今に同情の噂の種に爲つて居る。

船の扱ひは小さいうちから、親が教へる習はしである爲に、折々此様な情無い不幸がある。保土の島でも二三年前に、他の者より些し先に五島を出た、親子三人の船が戻つて来なかつた。別にひどい大荒れでは無かつたけれども、船が如何にも弱々しい古船であつた。仲間の人たちは蟲が知らせたか、之を氣遣はしがつて色々忠告をした。もう僅か待つて皆と一緒に引上げようぢや無いか。何も一日を争うて還るにも及ぶまいと謂つたが、どうしたものか仕事都合が有ると、何でも構はずに出帆してしまつた。さうして永遠に何處へか往つてしまつたのである。此附近の村役場には大抵一件か二件、毎年の徴兵事務に際して所在不明者の煩はしい手續を繰返さねばならぬ者がある。それが皆此類の、死んだに相違ない若者ばかりである。身寄や親しかつた人々には、死んだ者よりも猶一層の苦

痛を與へる。明かに死んだ者には年忌が有る。假令其時は胸が裂ける程に悲しみ慕うても、月日が立つうちには間が遠くなり、年々の祭や供養が自然の垣根を作つてくれる。之に反してどうして居るか分らぬ人々の幻の始末は、司法や行政の法規よりも更に面倒である。其を考へての思遣りでもあるまいが、漁師たちの方でも行方不明になることを、死ぬより以上の不幸と感じて居るらしい。船の網は大切な物だ。是さへ有れば死んでも分らなくなるやうなことは無いと、自分を載せた船方なども謂つて居た。さうして又斯んな話もして居つた。

今からちやうど二年前に、臼杵の近くに在るセメント會社の工場へ、粘土を運んで來る伊豫の八幡濱の船が、豊後水道で難風に遭つて、六人の乗組は悉く死に、船と共に大濱村の浦に漂着した。其人たちは皆船の網で、しつかりと身體を縛り付けて死んで居たと謂ふ。那役所の吉野君は之を臨檢に往つたから、よく見て知つて居る。今思つても涙が出ると謂つて居た。よくよく働いたものと見えて、六人ながら手掌の皮が剥けて居た。十五六に爲る少年が先づ斃れたかと思はれ、網の一番細い處で船にくより附けてあつた。四人の若者も同じ網に順々に結ばれて死んで居り、四十二三歳の船長は最後に最も簡單で、太い繩で只一重だけ、腰の周りをゆはへて居たと云ふ。こんな立派な覺悟は此仲間でもまだ見たことが無い。一切の帳面と書付類、それから濡れては居たが三百何十圓の紙幣まで、悉く素肌に着着けてあつたので、一行の書置も無かつたが、願末は卽座にわかつた。えらい物である。

豊後は舞の本の、百合若大臣の故郷と云ふことに爲つて居る。浦の男女は今既に其歌を忘れてしまつたが、曲に現れた昔の愁と惱みとは相續して居る。玄界の離れ小島では、百合若はひたすらに故郷の家を戀焦れた。ロビンソンの物語と比べると、先づ基調に於て全く異つて居るのである。綠丸はロビンソンの犬猫とは違つて、空中自在の靈鳥であつたけれども、主人の旨を承けて豊後の

府中へ往來し、其妻子に安否を知らせるのを殆ど唯一の目的として居つた。百合若單衣の白い袖を斷ち切り、紙筆と血で書いて此鳥に持たせて遣ると、世間知らずの奥方は、大きな硯までも入用かと思つて、之を眞に結附けて還した。綠丸は硯の重さに堪へず、終に玄界の渚に來て死んだとある。坪内先生の説では百合若は即ちユリシスの作り換へと云ふことであるが、鷹の忠義の因縁を嗟歎したのは、恐らく日本の方ばかりであつて、しかも征戰事繁き時代の、所謂春園夢裡の人々に、新しい哀れを泣かしたものは、正しく艶に優しいこの島住居の一節であつたらうと思ふ。さうすれば此が又、我邦傳來の海の文學であり、且は海の民の深いなげきの聲でもあつたのだ。

雲海遠く隔たつた宮古の水納島にも、ほど同じやうな大和人の漂流談が有つて、此は百合若とは謂つて居らぬ。硯を負うて流れ着いた鷹の墓は、後世一つの靈場と爲つて居た。秋毎に此墓の上には、多くの鷹が海を渡つて來て休むので、永く新なる感動を人に與へたと謂ふことである。綠丸の翼を休めたと云ふ松は諸國に在る。出羽にも奥州にも此鳥の爲に築いた塚がある。百合若が後に廻國して供養をしたなどと謂ふは作り事で、多分は遠き昔勇ましい鷹の姿を見て何れの旅人の家でも之を生靈の音信を傳へるものと、考へてゐた名残であらう。絶海の孤島に獨り住む者、或はさうでもして生きて居るかと思ふ者の身内が、稍々肌寒い秋なかばに、遙々と渡つて來る鷹の聲を聽いて、忘れ難い有りし日の面影を深めるのは自然である。それと言ふのが無始の昔から、故郷は土であり、子孫は唯一の神主であることを、絶えず信じて居た我々の遺傳が、無意識に海を自由を制限してしまつた、その悲しい鎖國の名残であるかも知れぬ。

四 ひじりの家

日向路の五日はいつも良い月夜であつた。最初の晩は土々呂の海濱の松の蔭を、白い細かな砂をきしりつゝ、延岡へと車を走らせた。次の朝早天に出て見たら、薄雪ほどな霜が降つて居た。車の犬が藪を踏むと、其が煙のやうに散るのである。山の紅葉は若い櫨の木ばかりだが、新年も近いのにまだ鮮かに残つて居る。處々の橋の袂、又は藪の片端などに、榎であらうか今散りますとでも云ふやうに、忽然として青い葉をこぼし始め、見て居るうちに散つてしまふ木がある。土持殿の御支配の頃から、否々皇祖御東征よりも更に以前から、海に近い縣の里の野原では、寒い霜夜の月の明方毎に、斯うして物の縁が土に歸して居たのであらうが、或時或旅人が通り過ぎて、之を美しいと見るのは瞬間であるなどと、自分は有りふれた斯んな事を考へ出した。それといふのも自分が今尋ねて行く人の境涯が、餘り我々の生活と變つて居る事を、想像しながら來たからであつた。

南方の龍仙寺さんと謂つて尋ねて廻つたが、不思議と誰も知つた人には逢はぬ。そんな筈は無いのだ。内藤家の御祈願所の、隨分名の有る法印さんだと聞いて見る。それならば野田の稻荷山の行者殿に違ひ無い。もう此邊には他に無いからと謂ふので、旭がさして來た松山の霜解を、こつくと登つて見た。縞の着物に角帶の、髪は一寸も延ばした老人が、果して訪ねる谷山さんであつた。日向に移住して來て既に十七代に爲る。本國は大和で谷山覺右衛門と云ふ人、土持家の盛りの頃に兵法の師範として、子息の重右衛門を連れて下つて來た。所領は山の麓の大貫村で、野田山に砦を構へ、稻荷は即ち其城内の鎮守であつた。世中が改まつて内藤氏の藩が出来た時、只の臣下で居る代りに山伏に爲つてしまつたが、それでも火事に遭つてこの山上に移つた父の代までは、大貫の元の屋敷に續い

て居たさうである。稻荷大明神の右手には廣い平地が有つて、其中央に井戸がある。之を前に取つて今の住居が、背戸を谷間に臨ませて、幽かながらも城地の佛を遺して居る。明治五年に修験の職は廢せられたが、關東諸郡の山伏のやうに、神主や只の農家に爲らうとはせずに、作州津山の在から濃れ寺の名跡を買ひ、表向き之を引移したのが龍仙寺で、土地の人はまだ其名を知らぬ位である。以前の名は明實院、それを法印は御自分の名にして御座る。

鎮守の稻荷様は御寺だけに、吃枳尼天として祀つてある。詣る人が今風だから、華鬘や提灯の眞赤なものも仕方が無い、自分は歸り途にその數多い鳥居の下を通りながら、是とは縁も無い津輕の海岸の荒濱を思ひ浮べた。今年初秋の風の早大いに冷かな朝であつた。一つ事はかり考へながら、獨あの濱手の淋しい路を歩いた。曾て深浦沿革史を世に公にした海浦さんと云ふ人は、名が義觀だから或は僧侶だらうとは思つたが、あんな阿倍比羅夫の直承見たやうな、昔の儘の山伏だらうとは考へて居なかつた。自分まででもう五十一代、肉身の相續で此十一面觀世音に御仕へ申すと謂つて居られた。一宗の事相は淵底を究めた篤信の聖である。日本の國風に此ほどよく適合した永い歴史の一宗派を、何で又取潰して只の眞言寺に編入してしまつたかと六尺もある大きな體を前にのし掛かつて、まるで私がさうしたかの如く、眞正面から見詰められる。わしの寺は聖德太子様の時から、俗生活の儘で成佛する教に基づいて、肉食もすれば妻子も育んで來たものだ。世中が變つたからもう宜しいと、それを大目に見て置かれる寺とは話が違ふ。世間が八釜しく無いだけで、只の寺に女房を置くのはあれは非如法ぢや、破戒ぢや。わしの方は教理ぢや。手を組んで竝んで行かれるわけが無いのぢやとも言はれた。貴僧を見ると昔を見るやうな氣がします。定めて戰國の頃などは、此地方の勇士の家々と縁組なされ、薙刀などで大いに働いた人たちが、此御寺からも何人か出られたことであらうと謂つて見ても、にこりともせずに、此宗派の獨立せねばならぬことを説く人であつ